

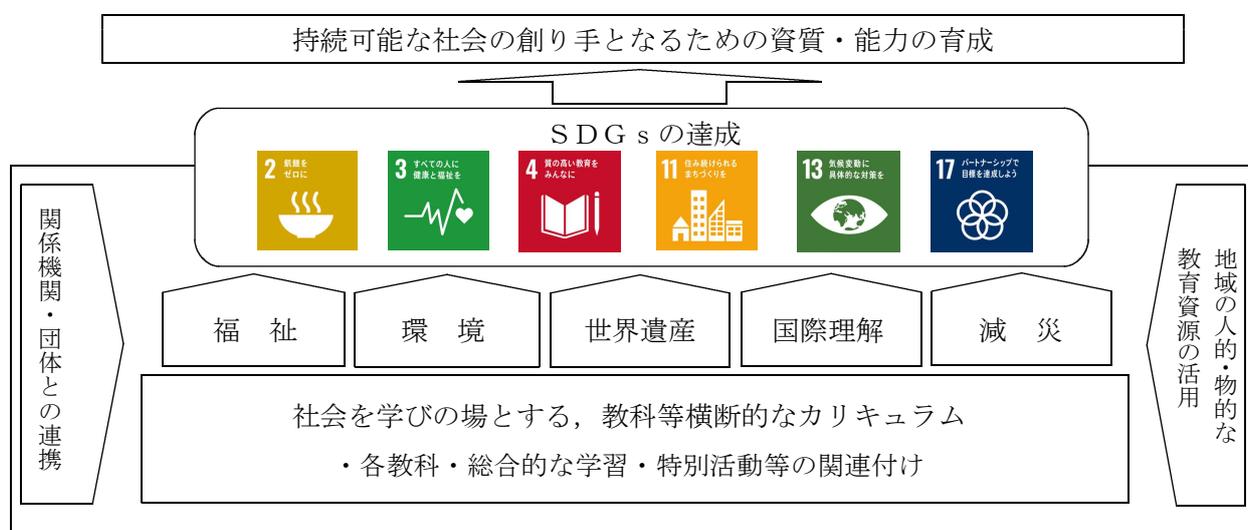
# 大牟田市立大正小学校

## 1 本校のESDの特徴

SDGsの達成を目指して、「フラワータウンプロジェクト」をはじめとする子ども達が地域のまちづくりに参画するプロジェクトと、世界の問題に目を向けた活動「iサイクル運動」「書き損じハガキキャンペーン」「STOP!地球温暖化 わたしたちにできることは」などに取り組んでいる。

社会を学びの場として、そこで見つけた課題を解決する活動を行うことを通して、子ども達が持続可能な社会の創り手となる力を身に付けるようにしている。

## 2 ユネスコスクールとしての活動・全体計画



「福祉」「環境」「世界遺産」「国際理解」「減災」をテーマとした学習を行う教科等横断的なカリキュラムを編成し、地域の人的・物的な教育資源を活用し、関係機関・団体と連携して実施している。

## 3 特徴的な活動事例

### (1) 大正フラワータウンプロジェクト

子ども達は、まちに花があふれ、人の心が花でつながるあたたかいまちになることを目指して、学校の花壇で花を育てたり、国道沿いのロータリーの花壇で地域の人々といっしょに花を育てたりしている。また、育てた花の苗をお世話になっている人々に届けたり、「子ども花屋」で販売したりするなど活動を広げている。本年度は、5月に「フラワーフェスティバル」を開き、「子ども花屋」「花の折り紙教室」「花の咲く木をさがそう」「花検定」などの催しを行い、花を通しての地域の方々とのつながり、かかわりを深め、プロジェクトの意義を地域の方々にも理解していただいた。

この活動を通して、子ども達はSDGs 11「住み続けられるまちづくりを」、SDGs 3「すべての人に健康と福祉を」の達成を意識するようになっている。



【人でにぎあうフラワーフェスティバル】

## (2) 「i サイクル運動」と「書き損じハガキキャンペーン」

5年生が「i サイクル運動」への参加を呼びかけ、全校で取り組んだ。「i サイクル運動」はペットボトルを回収して得られた資金を飢えに苦しむ開発途上国の子ども達への支援に充てる運動で、参加にあたっては、事務局をされている内科医の坂西先生に学校にご来校いただき、開発途上国の食糧事情や運動の目的・内容等をお話しいただいた。運動の目的・内容等を理解した5年生の熱心な呼びかけにこたえ、全校児童・保護者・地域の方からたくさんのペットボトルキャップが集まり、事務局にお渡しすることができた。

日本ユネスコ協会連盟の進める「世界寺子屋運動」の一環である「書き損じハガキキャンペーン」に児童会が取り組んだ。児童会役員からの発信に、家庭や地域からたくさんの書き損じハガキが集まった。本校のユネスコスクール発表会にお越しいただいた日本ユネスコ協会連盟事務局長の川上様から、世界の国々の子ども達の実情と「世界寺子屋運動」の目的や意義についてお話を聞くことができた。

子ども達は、世界の国々の実情を知り、自分達が国際社会に対して貢献できることがあると知った。SDG sについて理解を深め、その達成に向けて協力する態度、進んで参加する態度が育った。



## (3) 「STOP! 地球温暖化 わたしたちにできることは」

6年生が、マーシャル諸島共和国のデラップ小学校と「STOP! 地球温暖化」をテーマとするアートマイル国際協働学習を行った。両校の子ども達は、地球温暖化の現状・要因・解決策をともに学び、大正小学校の子ども達は学習参観日にその成果を保護者に向けて発表するとともに、親子で考えを出し合っ「STOP! 地球温暖化 親子宣言」をまとめた。宣言に挙げた具体的な取組はその後の生活の中で実践した。デラップ小学校とは、協働学習の集大成として両校の6年生の地球温暖化抑止のメッセージを込めた壁画を共同製作した。

この学習を通して、世界の問題を自分のこととしてとらえ、未来像を予測してともに行動しようとする態度が育った。



【デラップ小学校との共同製作壁画】

## 4 本年度の成果と課題

### ○成果

- ・子どもたちがSDG sを意識して、友達、家族、地域の人々、世界の人々とのつながりを深めながら目標を共有してともに行動することができた。未来像を予測して計画を立てる力、協力する態度、進んで参加する態度が育った。
- ・「i サイクル運動」事務局の坂西先生、日本ユネスコ協会連盟事務局長の川上様に、開発途上国の子ども達の生活や運動の意義についてお話しいただいたことが、子ども達が世界の国々に目を向けるきっかけとなり、行動を起こすもとなった。

### ○課題

- ・「STOP! 地球温暖化 わたしたちにできることは」のカリキュラムを次の6年生に引き継ぐための交流相手校への依頼をしておくこと、環境学習全体について各学年のカリキュラムの関連・系統性を見直ししながら、充実を図ることが課題である。